

## 101207 デジタル再生（音楽 CD）とアナログ再生（LP レコード）の違い

音楽 CD 再生の道は比較的一本道です。

音楽 CD に記録されている元々の音源がどうか？という問題はありますが、何しろ「記録の仕方」が規格化されています。

この記録を取り出す際、より正確な取り出し方に工夫があるとしても、同じデジタルデータが取り出されます。

D/A コンバーター以降はアナログの世界となりますが、D/A コンバーターに用いられる IC チップの種類は限られていますので、この部分も自由気儘というわけではありません。

これに比較すると、アナログ再生の道は多岐に亘り、言わば正解が無いと言えるのではないのでしょうか。

まず、そもそも LP レコードの盤質（カッティングの仕方など）が問題になります。

音楽 CD の場合は基盤の透明度が問題になることはありますが、記録の仕方が問題になることはありません。

次に音の信号を拾うカートリッジが問題になります。

おおまかには MM 型、MC 型、VM 型があり、それぞれのタイプで、それこそ千差万別のカートリッジが存在します（価格もですが）。

一方、音楽 CD の場合は光ピックアップがあるだけです。

更に、このカートリッジはヘッドシェルを介してトーンアームに取り付けられており、このアームにも幾つかのタイプがあります。

どちらも音質に影響を与えるでしょうし、正しく音信号を拾うためにはユーザーによる各種調整が欠かせません。

音楽 CD の場合はこれに相当する部分がありません。

これでようやく音の信号がレコードプレーヤーから出ますが、その先にはフォノイコライザーがあり、RIAA 偏差を補正してやらなければなりません。

強いて言えば、このフォノイコライザーは D/A コンバーターに相当します。

このフォノイコライザーは当然音に大きな影響を与えますし、それぞれのカートリッジに対応して「調整」が必要です。

何しろアナログ再生では機械的にも電氣的にもデリケートな部分が多いわけです。

フォノイコライザーから先はデジタル再生と同様になります。

こうして見てきますと、デジタル再生に比べてアナログ再生では「変数」が少なくとも 4～5 個は多いことになります。

これが、アナログ再生には正解が無い、別の見方をしますと、ユーザーの調整次第では

そのユーザーが目指す音をレコードから引き出せるということになります。  
アナログ再生の音質レベルはシステムを操作する人の技量・感覚次第です。  
趣味としてのオーディオを楽しむ場合はアナログ再生の方が奥が深いといえます。

音信号の滑らかさ、帯域の広さだけを捉えれば、ハイビット・ハイサンプリングのデジタル音源でもよさそうなものですが、このようにデジタル再生とアナログ再生では根本的な違いがあります。

次に、このような違いをむしろ利用して、アナログ再生の調整にデジタル再生をうまく活用する方法を考えてみます。

アナログ再生では「変数」が多い上、「調整」如何で音質が変化します。  
どうしてこのような音になるのか？かなりのベテランでないと、その原因・要因を素早く特定することは難しいでしょう。

こうした場合、デジタル再生をひとつの指標とする手があります。

アナログディスクと同じアルバムをCDで用意し、このCDデジタル再生とアナログ再生を比較試聴し、アナログディスクの再生音が全帯域でCD再生音を超えるように調整していくわけです。

CD再生の場合、余程のことがなければ再生音のバランスが大きく崩れることはありません。

最後に「音源」の入手の容易さについて。デジタル再生とアナログ再生ではどちらが有利か？という問題です。

基本的には、価格面も含めて、デジタル再生に軍配が上がります。新譜については特にそうしたことが言えます。

しかし、録音から全てアナログベースで制作された昔のレコードも中古で入手可能です。

一般的に言えば、「実用」という点ではデジタル再生、「楽しみ(=趣味)」という点ではアナログ再生ということになりそうです。

ただし、サウンドを商売として売るということであれば、最高に調整されたアナログ再生に分があると思われます。

人間の繊細な感覚で提供されるサービスに勝るものはありません。

以上